訪問看護師のための不登校支援スキルアップ養成講座
第２回「子どもの安心感と発達を踏まえた支援」講座要約

１．講座の進め方と受講者同士の学び合い

川村教授は、本講座が全６回で構成されており、各回の講義やグループワークを通して、不登校に関する多面的な理解と具体的な支援方法を深めていくことを説明した。最終回には、これまでの学びと実践を振り返るリフレクションを予定している。また、仕事や体調などの事情で欠席した場合にも補習の機会を設け、前回の内容を確認しながら学びを継続できるよう配慮することが示された。

今回のグループ編成は前回とは異なるメンバーで構成され、受講者には名刺交換や自己紹介を通じて交流を深めることが促された。不登校の子どもを支援したいという共通の目的を持つ者同士が、所属機関や職種、立場の違いを越えて、それぞれの経験や困りごと、実践の工夫を共有することは、地域における支援の質を高める上でも重要である。受講者同士のつながりそのものが、今後の多機関連携を支える基盤になることが期待される。

２．第１回の自己評価から見えた強みと今後の課題

川村教授は、第１回に実施した 24 項目の自己評価について集計結果を報告した。高い評価が得られた項目には、「継続的な自己研鑽に取り組むこと」「他者からの助言を実践の改善に生かすこと」があり、保護者を大切にして支える姿勢や、子どもの自己決定を尊重する姿勢も上位に位置していた。

一方、相対的に評価が低かった項目には、不登校の長期化を予防するための支援計画、多面的な背景理解、子どもの心理状態の把握、発達課題と不登校の関連を捉えることなどが挙げられた。また、自由記載からは、家族支援や保護者への対応に難しさや戸惑いを感じている実態がうかがえた。

これらの結果から、受講者には子どもや保護者を支えたいという意識がある一方で、その思いを具体的な支援に結び付けるための知識や技術をさらに深める必要があることが示された。
なお、最終回には同じ質問による自己評価を再度実施し、講座の前後で比較する予定である。個人を特定しない ID 方式を用い、協力は任意とした上で、講座の効果や今後の改善点を検討する。得られた結果は、報告会や学会等で活用する可能性もあると説明された。

３．不登校を「学びと生きる力」の視点から捉え直す

第１回の振り返りとして、川村教授は、学校に登校することの意味と、不登校という現象をどのように理解するかを改めて問いかけた。
支援において大切なのは、単に学校へ戻ることを目標とするのではなく、子ど

もが学び続ける機会を保障し、自分の生き方を選択しながら生きていく力を育むことである。学校への登校は、その実現に向けた一つの手段であり、唯一の目標ではないという視点が示された。

日本では、義務教育が学校への通学と結び付けて理解されやすく、学校に行かないこと自体が問題として捉えられる傾向がある。講義では、不登校児童生徒数の増加や、米国におけるホームスクールなどの制度にも触れながら、学校以外の学びの選択肢について考える機会が設けられた。

こうした比較を通じて重要なのは、他国の制度をそのまま取り入れることではなく、現在の日本の制度や地域の実情を踏まえながら、子ども一人ひとりに合った学びの機会をどのように保障するかを考えることである。

不登校支援では、「どうすれば登校できるか」という問いにとどまらず、「この子が学び続け、自分らしく生きていくために何が必要か」という視点を持つことが求められる。

4. 発達課題と不登校の長期化を理解する

川村教授は、子どもの発達段階と不登校との関連について説明した。
学童期は、学習や活動を通して勤勉性を育む一方、周囲との比較などから劣等感を抱きやすい時期でもある。思春期には、自分は何者なのかを問いながらアイデンティティを形成していく過程で、孤独感や葛藤を経験することがある。こうした孤独感は、必ずしも取り除くべきものではなく、自分自身を理解し、自己を形成する上で意味を持つ場合もある。

また、不登校の長期化を考える際には、子ども本人だけでなく、家族、学校、支援体制という４つの側面から状況を評価することが重要である。

- **子どもの側面**： 自己肯定感の低下、回避行動の固定化、生活リズムの乱れなど。
- **家族の側面**： 保護者の不安や疲弊、登校への過度な働きかけ、あるいは関わりの減少、就労やきょうだいへの影響など。
- **学校の側面**： 学習の遅れや行事への参加、周囲の視線に対する不安、学校との関係の希薄化など。
- **支援の側面**： 訪問や継続的な関わり、関係機関間の情報共有の不足により、家族だけで問題を抱え込む状況など。

これらの要因は相互に影響し合うため、一つの原因だけで不登校やその長期化を説明することはできない。
特に重要なのは、「不登校になった理由」と「不登校が長期化している理由」を分けて考えることである。不登校のきっかけを理解するだけでなく、現在の生活や心理状態、家族関係、学校とのつながり、支援の状況を継続的に確認する必要がある。

さらに、子どもの回復には段階があり、まず休養を必要とする時期、家庭内で安心して過ごしながら回復する時期、社会とのつながりや学びへの関心が戻り、登校を含む次の行動を検討できる時期などがあることが紹介された。
頭痛や腹痛、起床困難、玄関や教室に入れないといった状態についても、単なる怠けや意欲の問題と決め付けず、強いストレスや不安に対する心身の反応として理解する視点が大切である。子どもの状態を見極めずに登校を促すのではなく、今どのような支援が必要な段階なのかを評価することが求められる。

5. 子どもの安心感を支える関係づくり

第２回の中心テーマとして、川村教授は「子どもの安心感」を取り上げ、グループワークを通して、その意味を考える機会を設けた。

受講者からは、「一人ではないと感じられること」「誰か一人でも自分を認めてくれる人がいること」「家庭以外にも安心して過ごせる居場所があること」などが挙げられた。また、訪問看護においては、担当する看護師が頻繁に変わるよりも、同じ看護師が継続して関わる方が、子どもにとって安心感や信頼関係につながりやすいのではないかという意見も共有された。

川村教授は、安心感のあり方は発達段階によっても異なることを説明した。
学童期には、保護者や教師との安定した関係、家庭や学校での居場所、生活リズムやルールの安定、努力や成果を認められる経験が重要となる。一方、思春期には、親から心理的に自立していく過程を尊重しながらも、必要なときには支えてもらえるという感覚、信頼できる友人関係、自分の考えや感情を認められる経験が安心感につながる。

さらに、扁桃体の働きやミラーニューロンに関する説明を通して、支援者や保護者の表情、声の調子、接し方が子どもの心理状態に影響することが示された。大人が不安や焦りを強く表すと、子どもの警戒心を高めてしまう場合がある。そのため、子どもと接するときには、柔らかく穏やかな表情を心がけ、評価や説得を急ぐのではなく、子どもを大切に思い、応援したいという姿勢を伝えることが重要である。

安心感は、言葉で「大丈夫」と伝えるだけで生まれるものではない。関わりの継続性や態度の一貫性を通じて、子どもが「この人なら安心していられる」と実感できる関係を積み重ねることが、支援の基盤となる。

6. 子どものペースを尊重し、変化への準備性を見極める

グループワークでは、子どものペースを尊重する支援について意見交換が行われた。受講者からは、支援者や保護者の都合が優先され、いつの間にか大人のペースで支援を進めてしまうことがあるという気づきや、子どもが何を求めているのか、日々どのように過ごしているのかを理解することの大切さが共有さ

れた。

川村教授は、子どものペースを尊重することは、単に急がせないことや、無理をさせずに待ち続けることと同じではないと説明した。
大切なのは、子どもの発達段階や心理状態を踏まえ、本人が変化に向けてどの程度準備できているのかを見極めることである。その上で、今の状態から無理なく踏み出せる「半歩先」を子どもと一緒に探していくことが支援の要点となる。

例えば、会える人の範囲、話せる内容、外出できる場所、他者との交流、進路について考えることなど、子どもが受け入れられる範囲を丁寧に確認する必要がある。大人が考える目標を先に設定するのではなく、子ども自身の反応や意思を確かめながら、次の一歩を共に考えていく姿勢が求められる。

また、前頭前野の成熟には長い時間を要することから、子どもは自分の困難を十分に言語化したり、客観的に捉えたりすることが難しい場合がある。特に不安、恐怖、怒りなどの感情が強いときには、自分の気持ちを整理して言葉にすることが一層難しくなる可能性がある。
そのため、子どもが自分の気持ちを説明できないときに、「なぜ言えないのか」と責めるのではなく、本人が話せる範囲の言葉を待ち、言葉以外の表情や態度にも目を向けることが大切である。

さらに、子どもの状況を知りたいときには、「心配だから教えてほしい」という大人側の不安を前面に出すのではなく、「あなたは大切な人だから、あなたのことを知りたい」という気持ちを伝えることが提案された。子どもの思いを尊重しながら関係を築くことが、安心感と信頼につながる。

7．子どもの強みを見いだし、生きる力につなげる

講義の後半では、子どもの強みを支援に生かすことの意義についてグループワークが行われた。
受講者からは、強みを生かすことは、子どもが自分の力に気づき、生きていく力を育むことにつながるという意見が出された。また、本人が当たり前だと思っていることや、自分では強みと認識していないことを、支援者が見いだして伝えることによって、自己肯定感の回復につながる可能性があることも共有された。
川村教授は、強みを学力や技能などの目に見える能力だけに限定せず、優しさ、責任感、真面目さ、他者や動物を大切にする姿勢、過去の困難を乗り越えてきた経験なども含めて捉えることの重要性を説明した。

例えば、ゲームの話になると長く話せる子どもについては、ゲームに関する知識だけでなく、自分の関心を言葉で伝える力、相手と関係を築く力、楽しさや

笑顔を生み出す力などにも目を向けることができる。

このように、子どもの強みを多面的に捉え、本人と支援者が共有することは、「自分にもできることがある」という感覚を育み、自己肯定感の回復を支えることにつながる。さらに、自分の力を実感することは、新たな活動や人とのつながりに向かう準備性を高める可能性もある。

不登校という状態や、できなくなったことだけに注目するのではなく、その子が持っている力や、これまでの生活の中で培ってきたものを見いだすことが、本人の可能性を広げる支援につながる。
なお、時間の都合により「強みを生かした支援」の講義は途中までとなり、残りの内容は次回に引き継ぐこととなった。最後に、受講者は当日の学びや感想をレスポンスシートに記入し、講座を振り返った。

8. 第２回の学びから見えてきた支援の方向性

今回の講座では、不登校を登校の可否だけで判断するのではなく、子どもの発達、心理状態、家庭環境、学校との関係、支援体制などを多面的に捉えることの重要性が確認された。

また、支援の出発点となるのは、子どもが安心して自分らしくいられる関係を築くことである。安心感を土台として、子どものペースや意思を尊重しながら、本人が踏み出せる小さな変化を共に探していくことが求められる。

そのためには、子どもの困難や課題を把握するだけでなく、本人が持っている強みや可能性にも目を向けなければならない。支援者が子どもの強みを見いだし、それを本人と共有することは、自己肯定感を育み、自分の人生を選択していく力を支えることにつながる。

訪問看護師による訪問型伴走支援においても、訪問回数や支援内容を増やすこと自体を目的とするのではなく、子どもと家族が安心して関われる関係を継続し、その時々の状態や準備性に応じた支援を行うことが重要である。
「登校させるための支援」から「子どもが学び続け、自分らしく生きていく力を支える支援」へ。

今回の講座は、その視点を具体的な支援に結び付けるために、子どもの安心感発達課題、ペースの尊重、強みの活用について理解を深める機会となった。

9. 今後の対応事項

- 教授より今回の養成講座を研究目的として公表することに対して、講座の前後比較や分析、報告会・学会等でのデータ活用について、研究説明書と同意書を確認する。協力する場合は、必要書類に署名を記入して提

出する。

- レスポンスシートに、当日の学び、印象に残った内容、実践に生かしたいこと、感想などを記入し、提出する。
- 欠席者への補習を含め、全６回の学びを継続できる体制を整える。
- 最終回に自己評価を再実施し、講座前後の変化を分析する。
- 第２回で扱いきれなかった「強みを生かした支援」の内容を次回に引き継ぐ。
- 受講者の学びや実践の振り返りを、今後の支援方法の検討と不登校支援ガイドブックの作成に生かす。

